

福釜の里

安城市福釜町

「ことしやあ水は、大丈夫かなあ、おばあさんや。」

「そりやあ、おじいさんの心がけしだいじゃねえかのう。」

人のいいおじいさんは、いじの悪いおばあさんのぐちを聞きながら、田んぼを耕していました。すると、ゴボツゴボツ、ゴボツゴボツと音がして、クラッ、クラッ、クラッと、地面がゆれだしました。

「なんだ、こりやあ。」

おばあさんはもう逃げ腰になって、れんげの花の咲くあぜみちにのけぞっていました。ゴボツ、ゴボツ、ゴボツゴボツと田んぼの向こうの低いところから、また音が聞こえていました。おじいさんが恐る恐る近づいてのぞいてみると、クラッ、クラッ、クラッと、地面がまだゆれ続けていました。そこだけがぽっかりくぼんでいて、ゴボツ、ゴボツと、泥水が吹き出してゆれていました。

「おばあさんや、水だあな。きてみい。」

そう言っておじいさんがくぼみに近づくと、ゴボツゴボツとひどく吹き出し、金色のものがゆれ動いていました。

「おかまじや、金のおかまが吹き出した。おお、おばあさん、はようきて、見てみい。金のおかまじやあ。」

おばあさんがかけよつてのぞくと、ゴボツゴボツと、泥の中にもぐつてしまいました。おじいさんがのぞくと、ゴボツ、ゴボツ、ゴボツと、金のおかまが出てきました。

「おばあさん、はよう、はよう、はようきてみい。」

おばあさんがのぞくと、また消えてしまいました。

「おらをばかにしとる、ふん、おもしろくもねえ。」

そう言い残して、おばあさんはすたすた先に家へ帰ってしまいました。

おじいさんはおかまをひぎにのせ、泥を取り、布切れていてねいにみがきました。いろいろの火におかまは、金色に光り輝いていました。

さつきからうらめしい顔でにらみつけていたおばあさんは、太いたきぎをにぎりしめると、いきなり金のおかまをなぐりつけました。

「いたいよう、いたいよう。」

金のおかまは泣いていました。

「おお、かわいそうに。」

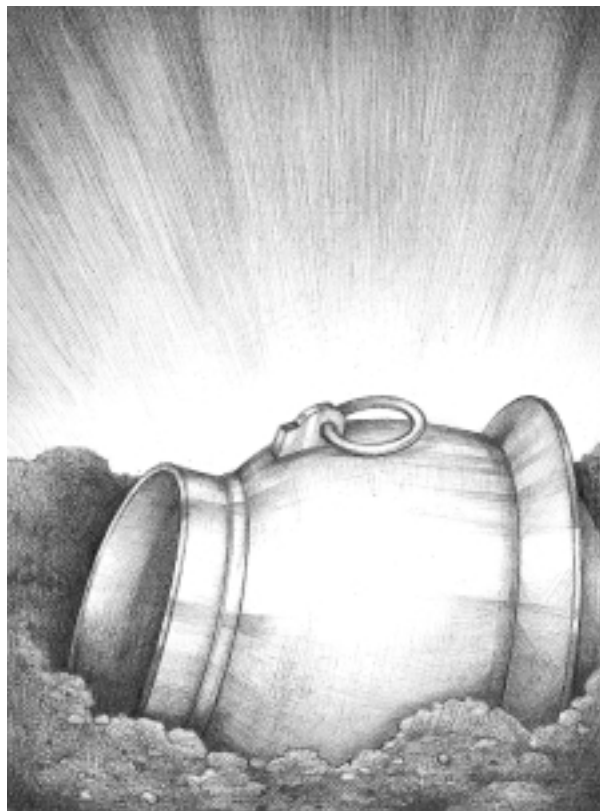
おじいさんがひぎにだきかかえても、まだ

金のおかまは泣いていました。

「帰りたいよう、帰りたいよう。」

「よしよし、おまえは神様のところへ帰してやろう。」

そう言っておじいさんは、明神さまのやしろに、金のおかまを納めました。



金のおかまの吹き出したくぼみからは、きれいな水が流れ出し、その近くの田んぼではお米がたくさん取れるようになりました。それから、その村を『吹釜の里』と呼ぶようになりました。

文 田中みのる
絵 桑戸 定